静岡発 こう読む

「ラジオ下神白」

▶▶▶加藤　裕治

先日、デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）で行われたトークセッションに参加してきた。この施設は、1927年に建築された神戸市立生糸検査所の建物を利用し、2012年に開館。館内には三宮図書館も併設され、にぎわっていた。

私が参加したのは「災間スタディーズ」。「災間」とは、社会学者の仁平典宏氏が東日本大震災後、「厄災が何度でも回帰しうることを前提」として、持続性のある社会を考えるために提唱した概念だ。阪神・淡路大震災から30年の節目を迎える25年に向け、一筋縄でいかないこの概念を使って、災厄の経験を、どのように分有するのか。それを考えるセッションだった。

また同時に上映された小森はるか監督の「ラジオ下神白（しもかんじら）」は、予想以上に興味深かった。この映画は、文化活動家のアサダワタル氏が、16年から福島県いわき市の県営復興団地「下神白団地」で行った被災地支援活動を、映像で記録したものだ。

「ラジオ」とあるが、実際には団地の住民に話を聞き、思い出の曲を教えてもらい、それを「ラジオ番組風」に演出して録音し、CDにして配布するという活動だ。CDであればいつでも聴けるし、配布の際の訪問が見守りにもなるというメリットもある。

書きたいことが山ほどある活動だが、この支援のきっかけの一つをアサダ氏が紹介していた。団地には、福島の原発事故で避難した4つの町の方々が住んでいる。互いに道ですれ違ってもなかなか声をかけられない。だがこのCDを配布することで、互いの思い出話や好きな音楽の話を聞くことになる。「ほんのり、その人の背景がわかってくる」とアサダ氏。次に道で出会う。声をかけるかはまだ迷う。だが垣根が少し低くなっている。安心感も生まれる。

互いを知らなくても生きてはいける。しかし相手の話を少しだけ聞いてみる。すると相手にも生活があり、人生があることがわかる。この発想からの活動が「ラジオ下神白」だと思う。この活動は、今、さまざまな場所で必要とされるものを伝えている。

（静岡文化芸術大教授）

2023年11月26日
中日新聞（朝刊）p.5